

「鳥たちよ、お前たちがいるこの木から火がでるぞ、  
鳥たちよ、四方へ飛び去って逃れよ、  
投げ所としているものがかえって原因となって死をもたらすことがある」

前回やった偈の後はまた本文に戻ります。

Bodhisattassa vacanakarā paṇḍitā sakuṇā tena saddhiṃ  
ekappahāren' eva uppatitvā aññattha gatā,

例のごとく、単語の語尾を注意深く観察しながら、どこが主部でどこが述部かを見定めていきます。sakuṇā が sakuṇa (鳥) の複数・主格で主語になっていると考えます。そうすると、その前にある paṇḍitā と vacanakarā は両方とも語尾が - ā で sakuṇa と同じですから、二つとも主語の sakuṇā を修飾する形容詞ではないかと考えるのが自然です。Bodhisattassa は Bodhisatta の属格と考え、次の vacana (言葉) と結びつけることにします。Vacanakara はコンパウンドです。kara には「作る」という意味がありますから、vacanakara で「言葉を(実際の行動に)作る」つまり「言葉を実際の行動に移す、言葉に従う」と考えれば意味が通ります。paṇḍita には「賢い」という意味の形容詞があります。そうすると、結局ここまでは次のような意味になります。

「菩薩のお言葉に従った賢明な鳥たちは、」

当然、賢い鳥たちは菩薩のアドバイスに従って、その木から逃げるために飛び立ったわけですから、その後に「飛び立つ」というような意味の動詞があるのが自然です。そのような目で見ていくと、uppatitvā という単語が目飛び込んできます。例の動詞に付く -tvā という語尾です。uppatati は「飛び立つ」。-tvā はいわゆるジェラント(「～して」と訳せばOK)ですから、「飛び立って」となります。

「飛び立って」だけでは何か尻切れとんぼの感じがします。「飛び立って～した」の「～した」の部分がある後にあって、それが述部になると考えていきます。最後の gatā が gacchati の過去分詞「行った」で述部になっているのです。それが証拠にちゃんと主語に合わせて複数形の語尾になっています。aññattha は「他の場所へ」ですから、ここまでは次のようになります。

「菩薩のお言葉に従った賢明な鳥たちは、菩薩とともに直ちに他の場所へ飛び立って行った、」

残った部分のまず tena saddhiṃ の saddhiṃ は、もともとは名詞の目的格だったものが副詞になり、さらに英語の前置詞のように使われていると考えればよいと思います。パーリ語などでは、前置詞(パーリ語では、英語とは異なり、名詞が前に置かれる方が普通ですから、むしろ「後置詞」と読んだ方が適当かもしれません)によって、名詞の格が決まってくるという大切なルールがありますから、注意が必要です。saddhiṃ のような「～とともに」という意味の前置詞は多くの場合、具格(インストゥルメンタル)を伴います。tena は tad (彼) の具格です。彼、つまり菩薩とともに、ということになります。ekappahāren' eva の部分は、発音の変化(=連声)によってこうなっているので、もともとは ekappahārena eva です。eva は強めの言葉ですから訳すときはあまり気にする必要はありません。ekappahārena は eka と pahāra のコンパウンドの具格です。ここでは「直ちに」という副詞になっていることに注意して下さい。

(続く)

前回やったところの次の文に移ります。

ye pana apaṇḍitā te “ evamevaṃ esa bindumatte udake kumbīle passatīti ” tassa vacanaṃ agahetvā tatth'eva vasimsu.

この文のポイントは、まず第一に ye が関係代名詞だということです。前にも申しあげましたように、英語の関係代名詞に慣れてると却って分かりにくいところがありますからご注意ください。

apaṇḍitā は paṇḍita 「賢い」に a という否定の意味を表す接頭辞がついていますから「賢くない」になります。pana は接続詞でここでは英語の but や while (「一方」) の意味で用いられています。ただし、パーリ語の接続詞は英語の場合と異なり、文頭には来ないで最初の語の次に来ますから注意してください。ye apaṇḍitā は ye (sakuṇā) apaṇḍitā と考えればよいと思います。

「一方、愚かな鳥たちは」

te は代名詞で、「その愚かな鳥たちは」ということになります。このようにもう一回くどく代名詞を用いるところもパーリ語の関係代名詞を用いた文の特徴のひとつだったことを思い出してください。

“ ”の中は後回しにすることにして、とりあえず主語 te に呼応する述語動詞を探すことにしましょう。

語尾を見ていくと、まず目に入るのが agahetvā のおなじみジェラント(「～して」)の語尾 -tvā です。そして最後の vasimsu の語尾がいわゆるアオリスト(動詞の過去形)の語尾だということに気が付きます。vasati (「住む、とどまる」)の過去形で、これが述語動詞ということになります。

tatth'eva は tattha と強調の eva。tattha は英語の there と同じで「そこで」。そう言えば何となく綴りも似ています。tassa はジェニティブ(属格)で、「彼の」つまり「菩薩の」。vacanaṃ は vacana (「言葉」)のアキュザティブ(目的格)で、「言葉を」。agahetvā は agaheti (「留意しない」)のジェラントで、「留意しないで」。

そうするとここまでは次のような意味になります。

「一方、愚かな鳥たちは、菩薩のお言葉を心にもとめずにその場にとどまりました」

賢い鳥たちは、この木から火が出るから危ないという菩薩の言葉に従って逃げたのですが、愚かな鳥たちは菩薩の言葉を気にもとめずその場にとどまったというわけです。

それでは残っている“ ”の中を見てみることにしましょう。

“ evamevaṃ esa bindumatte udake kumbīle passatīti ”

この部分は、菩薩の言葉に従わずにその場に残った愚かな鳥たちが、実際に口に出して言ったか心の中で思った内容です。最後の passatīti の部分は passati iti ですから「～と(その愚かな鳥たちは言った)」となります。ではその愚かな鳥たちは菩薩の言葉を耳にしたとき何と言ったのでしょうか。

evamevaṃ は evaṃ (「このように」)がふたつくついた形で、意味はほとんど同じと考えてかまいません。esa は etad (「これ」)のノミナティブ(主格)です。この場合は esa は鳥たちのリーダー=菩薩のことを指していると考えます。英語で Who is this? (「この人はだれですか」)というときの人をあらわす this と同じだと考えればよいと思います。

(続く)

前回の続きです。

“ evamevaṃ esa bindumatte udake kumbhīle passatīti ”

evamevaṃ は evaṃ (「このように」) がふたつくつついた形で、意味はほとんど同じと考えてかまいません。esa (「これ」) が主語で、ここでは鳥のリーダー = 菩薩のことを指しています。

述語動詞は最後の passati (「見る」) ですから、「こいつはいつもこのように～を見る」となります。では何を見るのかというと、すぐ前にある kumbhīle を kumbhīla (「ワニ」男性名詞) の複数・アキュザティヴ (目的格) と考えれば、「ワニを見る」ということとなります。

udake は udaka (「水」) のロカティヴ (処格) で、「水の中に」、bindumatte は bindu (「水滴」) と matta (「量」) のコンパウンド (複合語) で、全体が形容詞になっていると考えます。そうすれば、後の名詞 udake と性・数・格が一致して語尾が同じく -e になっていることの説明がつかます。

コンパウンド (「複合語」) についてはあらためて触れたいと思っていますが、このように本来名詞であるべきもの (matta 『量』は名詞ですから bindumatta という複合語も名詞であるべきはずなのですが) が形容詞になってしまう場合もあるということを記憶に留めておいて下さい。

「こいつはいつもこんなふうに水滴ほどの水の中にワニを見るのだ」と(言って)

当時、「水滴ほどの水の中にワニを見る」というような決まり文句かことわざでもあったのかもしれない。「ありえないようなことをいかにもっともらしく言う」というような意味でしょう。愚かな鳥たちは「またいつものが始まった。この木から火なんか出るわけないだろう。」と菩薩の言葉にとりあおうとしなかったわけです。ところで、ワニを意味する kumbhīla (クンビーラ) ですが、四国のあの金比羅さまの金比羅の語源だと言われています。そう言えば、コンピラ、クンビーラ、発音がそっくりです。

「一方、愚かな鳥たちは、『こいつは、いつもこんなふうに水滴ほどの水の中にワニを見るのだ』と言って、菩薩のお言葉を聞き入れようとせず、その場にとどまりました」

次の文に移ります。

Tato na cirass' eva Bodhisattena cintitākāren'eva aggi nibbattivā naṃ rukkhaṃ aggaheṣi.

tato は tad (「それ」) のアブラティヴ (奪格) で「その後、それから」、na cirassa eva は、na が否定語、cirassa は cira (「久しい」) の属格あるいは与格ですが、全体で「久しからず、間もなく」という副詞になっていると考えます。

Bodhisattena は Bodhisatta のインストゥルメンタル (具格)。その次の cintitākārena も cintitākāra のやはり具格で、cintita と ākāra からなる複合語 (コンパウンド) になっています。

cintitākāra からまず考えていくことにします。cintita は cinteti (「考える」) の過去分詞です。ただし、「考え」と名詞にとってもかまわないと思います。ākāra は「様」、英語で言えば way だと思えばいいかと思えます。in this way (「このように」) の way です。

そうすると、Bodhisattena cintitākārena の部分は、前後関係から考えて、「菩薩によって考えられたとおりに」という意味にとるのが適当です。

次の aggi (「火」) が文全体の主語で、nibbattivā は nibbattati (「生じる」) のジェラントで「生じて」、最後の aggaheṣi が述語動詞で gaṇhati (「補らえる」) の過去形アオリストです。naṃ は tad (「それ」) のアキュザティヴ (目的格)、rukkhaṃ は rukkhā (「木」) のやはり目的格で、aggaheṣi (「捕らえた」) の目的語になっています。

「それから間もなく、まさに菩薩がお考えになったとおりに、発火しその木に燃え移ったのでした。」  
(続く)

今回で sakuṇajātaka の本文はおしまいです。

Dhūme ca jālāsu ca uṭṭhitāsu dhūmandhā sakuṇā aññattha gantum nāsakkhiṃsu, aggimhi pativā pativā vināsaṃ pāpuṇiṃsu.

最初の三つの単語、dhūme, jālāsu, uṭṭhitāsu を見ると、すべて処格になっています。最後の uṭṭhitāsu は -ta で終わっていますから過去分詞だと思ってまず間違いありません。慣れてくると「あ、これは絶対処格(ロカティブ・アプソリュート)に違いない」と気が付くようになります。絶対処格は英語のいわゆる独立分詞構文と同じようなものと考えていただければ結構です。パーリ語の場合は意味的には「時」を表す場合がほとんどですから、when があるように「～するとき、～すると」などと訳せばOKです。

それでは個々の単語を見ていくことにしましょう。dhūme は dhūma(「煙」男性)の単数・処格。jālāsu は jālā(「炎」女性)の複数・処格。ca は英語の and に相当します。「A と B」と言いたいときは、本文のように A ca B ca あるいは A B ca となりますから注意して下さい。英語の and とも違いますし、日本語の「～と」とも似ているようで違います。uṭṭhitāsu は uṭṭhahati(「発生する」)の過去分詞 uṭṭhita の女性形の複数・処格です。絶対処格では最初の名詞の部分が主部、後ろの分詞が述部の関係になりますから、ここまでは「煙と炎が発生すると」となります。

次の dhūmandhā sakuṇā がこの文全体の主部になります。dhūmandhā は dhūma(「煙」)と andha(「盲目の」)のコンパウンドです。「煙で目が見えない」つまり「煙にまかれた鳥たちは」というような意味にとればよいと思います。述語動詞は nāsakkhiṃsu から na を取り除いた asakkhiṃsu です。-ṃsu は過去を表すアオリストの語尾です。nāsakkhiṃsu は否定の na と sakkoti(「～することができる」)のアオリスト asakkhiṃsu がくっついたものです。「～することができなかった」という意味になります。sakkoti(「～することができる」)は、目的語に不定詞をとります。たとえば「(彼は)行くことができる」であれば、Gantum sakkoti. となります。したがって、本文は、「他の場所へ(aññattha)行くことができなかった」という意味になります。

最後の部分は、aggimhi が aggi(「火」)の単数・処格。pativā は patati(「落ちる」)のジェラントで、「落ちて」 pativā pativā と連続しているので、「次々と落ちて」という意味になります。vināsaṃ は vināsa(「滅亡」)の目的格で「滅亡を」。pāpuṇiṃsu は pāpuṇāti(「～を得る」)の過去を表すアオリスト。「滅亡を得た」つまり「死んだ」という意味になります。

「煙と炎が発生すると、煙にまかれた鳥たちは、逃げることもできずに、次々と火の中に落ちて死んでしまった。」

外国語の公開講座などでも入門編だと定員を遙かに超える応募者があるのに、中級編になると激減してしまうという話を聞いたことがあります。ましてパーリ語のような日本語とは全く違う言語と取り組むというのは、大変な努力が必要なことだと思います。

有り難いことに私たちには「パーリ語文法」(水野弘元著)、「パーリ語辞典」(水野弘元著)という素晴らしい参考書と辞書があります。これらを手に置いて、根気よく地道にパーリ語の学習を続けていただくことを願っています。

次回からは、Sasajātaka(「うさぎ本生物語」)をまた皆様と一緒に読んでいく予定です。

(続く)